

ヴェーダ文献における brahmacārín- の語義 ——「学生」と「禁欲者」のあいだ——

梶原三恵子

はじめに：brahmacārín と brahmacārya

1. 「ヴェーダ学生」としての brahmacārín：(1) 初期・中期ヴェーダ
 2. 秘義の学習と brahmacārín
 3. 「ヴェーダ学生」ではない brahmacārín
 4. 「ヴェーダ学生」としての brahmacārín：(2) 後期ヴェーダ
- むすび

はじめに：brahmacārín と brahmacārya

インド最古の宗教思想を伝えるヴェーダ聖典において、brahmacārín- と brahmacārya- という2つのサンスクリット単語は、初期からみられる。すなわち、brahmacārín- はインド最古の文献『リグヴェーダ』(Ṛgveda, 以下 RV と略；前12世紀頃)の最新層部分から、brahmacārya- は RV に次いでインドで二番目に古い文献『アタルヴァヴェーダ』(Atharvaveda, 以下 AV と略；前10世紀頃)から確認される。

この2語を直訳すると、brahmacārín は「ブラフマンに携わる[者]」、brahmacārya は「ブラフマンに携わること」となる⁽¹⁾。これらに共通して含まれる

bráhmaṇ (「実現力をもつ聖なる言葉 [とその霊力]」)⁽²⁾とは、紀元前インドで隆盛をきわめたヴェーダの宗教（いわゆるバラモン教）の特に初期・中期における重要な思想要素のひとつである。その bráhmaṇ を語中に含んでいることから、brahmacārin- と brahmacārya- の2語が、ヴェーダの宗教にとって重要な存在ないし行いをさすものであったことは疑いない。この2語は、ヴェーダ文献のみならずその後のポスト・ヴェーダ文献でも頻繁に用いられ、さらにはブラフマニズム外の文献にも現れつづける。この2語が具体的に何をさすのか、年代と文脈ごとに用法をたどり、語義の範囲を確定することは、古代インド思想の理解に不可欠である。

一般に、brahmacārin は「ヴェーダ学生」（ヴェーダ聖典を学習する者；特にいわゆる「学生期」にある幼少期から十代の少年）、brahmacārya は「ヴェーダ学習」ないし「性的禁欲」と解される。つまり2語とも、ヴェーダ聖典の学習とそれによる聖典伝承に関わるというイメージがある。とはいえ、むしろ2語の意味には、時代、文献のジャンル、文脈によって振幅がある。

2語のうち brahmacārya- については、別稿〔梶原 2016a〕にて、広義の「禁欲的修行生活」——すなわち「[性的禁欲を含む種々の生活制限を遵守しつつ自らの務めに励む] 修行生活」——をさす場合と、狭義の「性的禁欲」をさす場合という二つの用法が、ヴェーダ文献古層から初期仏教文献にいたるまでみられること、そして、文献に現れる用例の語義範囲はこの二つの用法を両極としてその間のどこかに収まることを明らかにした。また、この語が「ヴェーダ学習」のみを限定的にさすことはむしろ少なく、「[自らの（その場合学生の）務めに励む] 禁欲的修行生活」における務めの一部ないし大部分として「ヴェーダ学習」が含まれる例が多いことも同稿にて論じた。

では brahmacārin- はどうであろうか。

本稿の結論の一部を先取りして述べると、brahmacārin の語義は、brahmacārya のそれとは、両者が語形上は対になっているにも関わらず、必ずしも常

に一对一で対応しているとは限らない。この2語の解釈に関する先行研究では、この点が十分に意識されていなかったように思われる⁽³⁾。具体的には、brahmacārya は古くから「禁欲的修行生活」全般をさし、そのうち「性的禁欲」という限定的意味での用例が増えていくのに対し、brahmacārín は、本稿で論じていくように、古くから「ヴェーダ学生」を明示的にさす例が確認され、狭義の「性的に禁欲している[者]」をさす用例が現れ始めてからも、「ヴェーダ学生」という語義は一貫して継続するのである。

本稿では、これらの点に留意し、ヴェーダ文献における brahmacārín の用例を、基本的に文献の年代に沿いつつ分類し、その語義の範囲を検証する。

1. 「ヴェーダ学生」としての brahmacārín: (1) 初期・中期ヴェーダ

本章では、初期・中期ヴェーダに属する『リグヴェーダ』、『アタルヴァヴェーダ』、プラーフマナ文献、ウパニシャッド文献における用例を検討する。以下にみるように、これらの文献では、brahmacārín は原則として、「師」の存在を前提とする「ヴェーダ学生」をさす。ただし、一般にイメージされる「8歳ごろから十代半ばの少年」というヴェーダ学生像は後期ヴェーダ以降に明確になるもので(4で後述)、必ずしも初期ヴェーダからみられるものではない。

1.1 『リグヴェーダ』: 初出例

サンスクリット文献における brahmacārín- の語の初出は RV の最新層に属する最終巻にある。RV ではこれが唯一例である。「バラモンの妻の不可侵の歌」の中で、brahmacārín は神々の肢となって奉仕するとされる：

RV 10.109.5 = AV Śaunaka 5.17.5; AV Paippalāda 9.15.5⁽⁴⁾

brahmacārī carati véviṣad viṣaḥ śa devānām bhavaty ékam āṅgam /

téna jāyām ānv avindad bṛhaspátih sómēna nītām juhvaṃ ná devāḥ //

brahmacārín は繰り返して奉仕し続けつつ動き回る。彼は神々の一つの肢となる。彼によってブリハスパティはソーマに連れ「去」られた妻を見出した、ソーマによってジュフー祭匙を「見出した」ように、神々よ。

brahmacārín が「奉仕する」者であることは、RV の次の時代（AV；次節参照）に明確になる「ヴェーダ学生」の特徴——師に奉仕する——に当てはまる。ブリハスパティ神が妻を見出す道具となったというのも、奉仕の一形態ととれる。「動き回る」ことも奉仕と修行の一環かもしれない⁽⁵⁾。

RV における用例はこの箇所のみであるため、この brahmacārín が「ヴェーダ学生」なのか、あるいは必ずしも学生に限らず何らかの形で「プラフマンに携わる〔者〕」をさすのかは決定しがたい⁽⁶⁾。いずれにしても留意すべきは、RV 最新層の時点で、brahmacārín が、奉仕する者という従属的立場ではあるものの、神々の肢とよばれるほどの高い地位にあったことである。

1.2 『アタルヴァヴェーダ』古層：知識への関与

『アタルヴァヴェーダ』（AV）は、Śaunaka 派伝本（AVŚ）と Paippalāda 派伝本（AVP）という2学派のテキストが伝わっている⁽⁷⁾。両学派ともテキスト内にはいくつかの年代層がある⁽⁸⁾。brahmacārín の語は、以下にみていくとおり、古層から最新層にわたって現れる。

神々の肢（= RV）

前節でみた、RV における brahmacārín の唯一の用例は、AV 古層にも収録されている。これが AV での用例の古いもののひとつであろう。

AVŚ 5.17.5; AVP 9.15.5 = RV 10.109.5（テキストは前掲）

brahmācārīn は繰り返し奉仕し続けつつ動き回る。彼は神々の一つの肢となる。彼によってプリハスパティはソーマに連れ「去」られた妻を見出した、ソーマによってジュフー祭匙を「見出した」ように、神々よ。

この詩節を含む讃歌は RV のものとパラレルである⁽⁹⁾。上述のとおり、AV では brahmācārīn の用例数は増え、かつ以下に述べるように「ヴェーダ学生」という意味が明確となるから、同じ詩節にある同じ語であっても、AV においては「ヴェーダ学生」という意味が RV 最終巻におけるよりも強く意識されていた可能性はある。この詩節から brahmācārīn について得られる情報は、RV の場合と同じ、「奉仕する者、動き回る者、神々の肢となる者」というものである。

「ブラフマチャーリン讃歌」：知識と熱（苦行）に関与するヴェーダ学生

AV における brahmācārīn の用例の多くは、同じく AV 古層に属する、通称「ブラフマチャーリン讃歌」（AVŚ 11.5; AVP 16.153-155）に含まれている。この讃歌は、種々の主題に仮託して太陽の活動を謳う一連の太陽讃歌のひとつである⁽¹⁰⁾。背後にある主題である太陽の活動が、表面上の主題である brahmācārīn に仮託されて語られる。

この讃歌の重要な点のひとつは、brahmācārīn の「師への入門」を語っていることである。入門の際は、師の胎児となって誕生すると謳われる：

AVŚ 11.5.3; AVP 16.153.2

ācāryā upanāyamāno brahmācārīṇaṃ kṛṇute gārbham antāḥ /

tām rātrīṣ tīsrā udāre bibharti tām jātām drāṣṭum abhisāmyanti devāḥ //

師は brahmācārīn を自らに入門させつつ内側で自分の胎児とする。[師は] 彼を三夜のあいだ腹に保つ。彼が生まれると、見るために神々が集まって

くる。

「師 (ācārya)」という語が明確にいわれていること、「入門させる (ūpanī) ⁽¹¹⁾」という動詞が用いられていることから、この brahmacārīn は明らかに師に入門する「ヴェーダ学生」である。師の胎児となることで、入門者はヴェーダ学生としていわば生まれ変わる。この点において、ヴェーダ学生としての brahmacārīn は、師の存在を前提とし、師の存在に依存する。

この、ヴェーダ学生が師から誕生するという観念は、これ以降、中期・後期ヴェーダをとおして現れ、後期ヴェーダのダルマ文献（前3世紀頃～紀元前後）では、入門式を行う者が上位三階級すなわち再生族 (dvija「二度の誕生をもつ者」) である、というヴァルナ制度の理論づけに用いられるに至る ⁽¹²⁾。

入門時に師の胎児になり、ヴェーダ学生として新生すると、知識に与る資格を得る。同讃歌にある以下の詩節では、ヴェーダ学生が、天と地に隠されたブラフマンの知識の秘密を守り、それを独占すると謳われている。

AVŚ 11.5.10; AVP 16.153.10

arvāg anyāḥ paró divás pṛsthād gúhā nidhī níhitau brāhmaṇasya /
táu rakṣati tāpasā brahmacārī tát kévalam kṛṇute brāhma vidvān //

一方は此方に、もう一方は天の背の彼方に、ブラフマンの知識 (brāhmaṇa) の二つの蓄えは秘密裡に蓄え置かれた。それら二つを熱 (tāpas ⁽¹³⁾) によって brahmacārīn は守る。[彼は] ブラフマンを知っていてそれを独占する。

「ブラフマチャーリン讃歌」には、学習への直接の言及はみられないが、師に従属する立場にあるヴェーダ学生が、ブラフマンの知識を守り独占するということは、師からブラフマンの知識を学び取りそれを受け継ぐということをさ

すと考えられる。

上掲の詩節にもあるように、この讃歌では、brahmācārīn が「熱」(tāpas) によって働くことが繰り返し語られる。tāpas は「熱」一般をさすと同時に、「苦行」をさす最も一般的なサンスクリット語でもある。この語は、苦行がヴェーダ学生の特徴のひとつであることを示す一方で、この讃歌の真の主題である太陽とヴェーダ学生を関連づける文学的動機にもなっている。

この讃歌では、ヴェーダ学生の活動として、師を支え、乞食し、薪を運び、苦行をおこなうこと⁽¹⁴⁾、などが宇宙的なスケールで謳われる⁽¹⁵⁾。これらはいずれも、ヴェーダ学生が師に奉仕する修行的な生活を送っていることを示している。ほかにこの讃歌では、彼の装束として、メーカラー (mékhalā) という特殊な帯と、長い鬚を有することが語られる⁽¹⁶⁾。

その他の AV 古層の用例：知識への関与、師への奉仕

その他の AV 古層に属する巻にみられる brahmācārīn の用例と、その描写を要約すると、次のとおりである⁽¹⁷⁾。

(1) 「帯 (mékhalā) の歌」(AVŚ 6.133; AVP 5.33) には、死神の brahmācārīn が、死神のために生類を乞い、生類と死をメーカラーという帯で縛り付ける、という神秘的な詩節がある。ここでも brahmācārīn は、師—この場合は死神—に奉仕する (生類を乞う = 師のために乞食する) 「ヴェーダ学生」の一種と解せる。(2) 「智慧 (medhā) の歌」(AVŚ 6.108; AVP 19.17) では、brahmācārīn は「智慧を最初に飲む者」といわれ、知識に与る者という彼の性質が顕れている。(3) AV 古層にはほかに、アグニ (火; 火神) と木、ソーマと植物、神々と不死、など、神々や諸要素を一組ずつにし、変奏曲のように主題のペアを変えて詩節を続けていく讃歌がいくつかある。この種の讃歌のいくつかで、brāhman と組み合わせられるのが、brāhmaṇā (バラモン) ないし brahmācārīn である⁽¹⁸⁾。バラモンと並ぶ者として、brahmācārīn がブラフマン (「聖なる言葉

とその霊力)」と強固な関係をもつとみなされていた証左である。

要言すると、AV 古層の時代には、brahmacārin の語は、「師」の存在を前提とする「ヴェーダ学生」を明らかにさすようになっていた。ヴェーダ学生は、知識および智慧と深く結びつき、師のもとにいる学生という面をみせる一方で、師に奉仕し、薪を運び、乞食するという、修行者的な面も示す。AV 古層におけるヴェーダ学生は、師に奉仕し従属する立場ではありつつも、ブラフマンの知識を守る者、智慧に最初に与る者、ブラフマンと固く結びついている者として、太陽讃歌のモチーフとして太陽と同一視されるほどの高い地位を、AV の詩人に認められていた。

1.3 『アタルヴァヴェーダ』新層：師の資産としての学生

AV の新層に属する AVŚ 第19巻と第20巻、AVP 第19巻と第20巻には、片方の学派にしか伝わっていない讃歌や詩節も多い。本節で扱う資料はいずれも AVP にのみ収録されているものである。

以下に掲げるのは、AVP 第19巻所収の散文マントラに含まれている、いわゆる「支配者の祈禱 (*adhipati formulas*)」の一部である。brahmacārin が、支配者の資産の一部として言及されている⁽¹⁹⁾：

AVP 19.53.15; cf. 19.53.16-17

agniḥ pṛthivyā adhipatiḥ somas tvāvatu vidma tvā viddhi mā /
adhipatir asy adhipatiṃ mā kṛṇu gavām aśvānām puruṣāṇām brahmacāriṇām
bhūtyā annādyasya //

アグニは大地の支配者である。ソーマは君を嘉せよ。我々は君を知っている。君は私を知れ。君は支配者である。私を支配者とせよ、牛たちの、馬たちの、使用人たちの、brahmacārin たちの、繁栄の、食物の。

支配の対象として挙げられているもの（牛、馬、使用人, brahmācārīn, 繁栄、食物）からみて、このマントラを唱える「支配者」は、一家を構える家長である可能性が高い。ヴェーダを学生に教える師は、既婚の家長であるのが通例であるから⁽²⁰⁾、この brahmācārīn は、家長たる師に従属する「ヴェーダ学生」と解して差支えない。

前節でみた、AV 古層の「ブラフマチャーリン讃歌」では、brahmācārīn が師に従属する「ヴェーダ学生」である点は同様であるものの、彼の活動が太陽の運行と同一視されて謳われるほど、ヴェーダ学生の地位はバラモンたちの世界において高いものであった。

それに対して、本節でみた AVP 19 のマントラでは、ヴェーダ学生は家畜や使用人と同列に扱われており、地位が相対的に低下しているように見える。低下しているというより、ヴェーダ学生がバラモン社会の構成員として一定の数を占めるようになり、その地位が具体的にになってきているというべきかもしれない⁽²¹⁾。以下にみるように、この AV 新層以降、ヴェーダ学生という存在は、より現実的な描写を伴って文献に現れるようになる。

1.4 『アタルヴァヴェーダ』最新層からウパニシャッド：学生を得る

AV 最新層にあたる AVP 第 20 巻の後半部には、安産や子供の安全の祈願、ヴェーダ入門儀礼など、後にグリヒヤーストラ (Gṛhyasūtra [GS]; 後期ヴェーダに属する各学派の家庭儀礼綱要書) で扱われることになる、人生儀礼に関連するマントラが散在している。それらの一部は、ブラーフマナ文献の補遺的部分やウパニシャッド文献の補遺的部分に断片的な対応箇所を有し、AV 最新層とブラーフマナ新層およびウパニシャッドが時代的に重なっていたことを示している⁽²²⁾。以下、本節では、この層に属する資料のうち、brahmācārīn に言及するものを検討する。

AVP 20 とウパニシャッド：「学生たちよ、来い」

次に掲げるのは、AVP 第20巻に収録されている散文の「師がヴェーダ学生を募るマントラ」である。類似のものがヤジュルヴェーダ（YV）系2学派のウパニシャッドの補遺的部分（Taittirīya-Upaniṣad [TU] 1; Kāṭha-Śikṣā-Upaniṣad [KāṭhŚU]）⁽²³⁾の、学習の修了に関する文脈にもみられる。

AVP 20.46.1-7; cf. TU 1.4.E-F; KāṭhŚU 4.4.E-F⁽²⁴⁾

ā mā gacchantu brahmacāriṇaḥ svāhā /1/ carāṇi svāhā /2/ vi rājāni svāhā /3/ asāni
bhādrebyaḥ śreyān svāhā /4/ yaśasvī janutām anu carāṇi svāhā /5/ devānām mā
manuṣyānām paśūnām brahmacāriṇām /6/ priyaṃ prajāpateḥ kṛṇu svāhā /7/

brahmacārin たちは私のところへ来い、スヴァーハー。/1/ 私は動き回ろう、スヴァーハー。/2/ 私は支配しよう、スヴァーハー。/3/ 善きものたちよりもすぐれたものと私はなろう、スヴァーハー。/3/ 名声をもち、人々（*janatām ?）について私は動き回ろう、スヴァーハー。/4/ 神々にとって、私を、人間たちにとって、家畜たちにとって、brahmacārin たちにとって、/6/ プラジャーパティにとって、好ましい者とせよ、スヴァーハー。/7/

次のマントラは、ウパニシャッドのほか、一部のGSにもみられる⁽²⁵⁾。

AVP 20.52.9; cf. TU 1.4.H; KāṭhŚU 4.4.H

yathāpaḥ pravatā yanti yathā māsā aharjaram /

evā mā brahmacāriṇo dhātā ā yantu sarvadā //

brahmacārin たちは私のところへ来い、スヴァーハー。水たちが山の坂道を通って来るように、月たちが日々〔来る〕ように、brahmacārin たちはいつでも私のところへ来い、ダートリよ。

ヴェーダ学生は、師のもとでのヴェーダ学習を修了すると、次は自分が結婚して家長となり、師として学生を持つ立場となる。ヴェーダ学生を募るこれらのマントラは、内容とウパニシャッドでの文脈からみて、師になった者が師としての名声と、前掲の AVP 19 のマントラにみられるような資産としての自分のヴェーダ学生を得ることを願って、唱えたものとみられる⁽²⁶⁾。

AVP 20 とブラーフmana新層：入門儀礼

AVP 第 20 巻の後半部には、GS のヴェーダ入門儀礼で用いられるものと似たマントラも含まれている。その中に、brahmacārin の語が現れる。

AVP 20.53.2

agner brahmacāry asi mama brahmacāry asi /

prajāpatiṣ tvā gopāyatu devāya tvā savitre paridadāmi svasti caratād ihāsau //

おまえはアグニの brahmacārin である。おまえは私の brahmacārin である。

ブラジャーパティはおまえを守れ。神サヴィトリにおまえを私は委ねる。

ここで安寧に行動せよ、何某よ⁽²⁷⁾。

類似のマントラが、ブラーフmana文献新層の入門儀礼の章にもみられる。入門儀礼の章とは、白 YV 所属の『シャタパタ・ブラーフmana』(Śatapatha-Bṛāhmaṇa; 以下 ŚB) 第 11 巻の一部と、黒 YV 所属の『カタ・ブラーフmana』(Kāṭha-Bṛāhmaṇa; 以下 KāṭhB) の入門儀礼に関する断章 (upanayana-brāhmaṇa; 以下 KāṭhB (u)⁽²⁸⁾と略) である⁽²⁹⁾。

ŚB の入門儀礼章では、冒頭で入門者が brahmacārya にやってきたと告げ、brahmacārin になりたいと言う。師は入門者の名を尋ね、上掲の AVP 20 のものと類似のマントラを唱えて、入門者の手を握る。

ŚB 11.5.4.2-3; ŚBK 13.5.4.2-3

áthāsya hástaṃ gr̥hṇāti / índrasya brahmacāry āsy. agnīr ācāryās tāvāhām ācāryās
tāvāsāv ity. ... /2/ ... prajāpataye tvā páridadāmi. devāya tvā savitré páridadāmi.
... /3/

次にこの者（入門者）の手を〔師は〕握る、「おまえはインドラの
brahmacārínである。アグニがおまえの師である。私がおまえの師であ
る、何某よ」と〔言って〕。…/2/…「ブラジャーパティにおまえを私は委
ねる。神サヴィトリにおまえを私は委ねる」〔と師は言う〕。…/3/

AVP 20 と ŚB 11 を併せみると、これらのマントラの発話者は師である。師
が入門者に「おまえは私の brahmacārín である」「私がおまえの師である」と唱
えかけていることから、brahmacārín は、入門すると師に所属することになる
「ヴェーダ学生」の意で用いられているとわかる。

さらに、師は、入門させたヴェーダ学生に対して訓示を行う。

ŚB 11.5.4.1, 2, 5; ŚBK 13.5.4.1, 2, 5; cf. KaṭhB (u) 47.1; 49.5-50.7

brahmacāryam āgām ity āha. / ... brahmacāry āsānīti. ... // ...brahmacāry āsīty
āha. /... apò 'śānéty. ... kárma kurv íti. ... samídham ādhehīti. ... mǎ suṣupthā íti. ...
apò 'śānéty.

彼（入門者）は言う、「brahmacārya に私はやってきた。…私は
brahmacārín になりたい」と。…「おまえは brahmacārín である」と〔師
は〕言う。…「水〔だけ〕を飲め」と〔師は言う〕。…「仕事を行え」と
〔師は言う〕。…「薪をくべよ」と〔師は言う〕。…「〔昼間に〕眠るな」と
〔師は言う〕。…「水〔だけ〕を飲め」と〔師は言う〕。

この訓示の内容をみると、入門してヴェーダ学生となった者は、水だけを飲

み、仕事を行い、薪をくべ [て師の祭火の世話をし]、昼間には眠らない、という、一種の修行生活を課されることがわかる。冒頭で入門者が「私は brahmācārya にやってきた。私は brahmācārīn になりたい」と言っていることから、入門の文脈では、こうした修行生活が brahmācārya であり、brahmācārīn はその修行生活を行う者でありヴェーダ学生であるということになる。

上掲の訓示文⁽³⁰⁾は、現存2種のブラーフマナの入門儀礼章において、ほぼ内容が一致する。GS 段階になると、文言に多少の異同はあるものの全学派の入門式に規定され、一種のマントラとして唱えられるようになる。

ブラーフマナの入門儀礼章では、この後、ŚB と KāthB のいずれでも、サーヴィトリ (Sāvitrī) とよばれる聖なる詩節⁽³¹⁾の教授を行うことと、その教え方が詳しく述べられる。入門者は師の胎児になり、誕生の際は、サーヴィトリと共に生まれると説明される⁽³²⁾。サーヴィトリ詩節の教授・学習は、入門者のヴェーダ学習の第一歩であり、師に入門することがヴェーダを学ぶためであることを象徴している。サーヴィトリ詩節の教授は、後の GS 段階では入門式の中心的儀礼行為のひとつとなる。

以上のように、AVP 20 所収のマントラでは、brahmācārīn の語は師に入門するヴェーダ学生をさしている。ウパニシャッドに対応がある、ヴェーダ学生を募るマントラには、師の資産としてのヴェーダ学生像が投影されている。ブラーフマナの入門儀礼章では、AVP 20 と対応のあるマントラを含め、GS の入門式の先駆形が示されている。

1.5 ブラーフマナ：brahmācārīn, brahmācārya, 学習

brahmācārīn と学習に関しては、ブラーフマナ文献に次の一節がある⁽³³⁾。

Taittirīya-Saṃhitā 6.3.10.5

jāyamāno vāi brāhmaṇās tribhīr ṛṇavā jāyate brahmācāryeṇārśibhyo yajñēna

devébhyaḥ prajāyā pitṛbhya. eṣā vā aṅṇó yāḥ putrī yājvā brahmacārivāśī.

バラモンは生まれてくるときに3つの債務をもって生まれるのだ、聖仙たちに対して brahmacārya, 神々に対して祭式、祖霊たちに対して子孫[という債務]を。息子を持つ[ことで祖霊への債務を弁済し]、祭式を行う[ことで神々への債務を弁済し]、brahmacārīn として住する[ことで聖仙たちへの債務を弁済する]者が、債務のない者なのだ。

別学派のブラーフマナ文献では、上記で聖仙たちへの債務と弁済とされる brahmacārya と brahmacārīn として住する (brahmacārivāśīn) ことの内容が、「学習」であると明示される：

ŚB 1.7.2.3; cf. ŚBK 2.6.4.3

ātha yād evānubruvītā / ténārṣibhya ṛṇām jāyate. tād dhy ēbhya etāt karóty. ṛṣīṇām nidhigopā iti hy ānūcānām āhūḥ. //

次に、彼はまさに「ヴェーダを」学習すべきであるゆえに、聖仙たちに対して債務を帯びて生まれる。というのは、そのとき、彼は彼らに対してこれをなす（債務を弁済する）から。というのは、「ヴェーダを」学習し終えた者のことを「聖仙たちの蓄えの守護者⁽³⁴⁾」と人々はいうから。

1.6 ブラーフマナ、ウパニシャッド：師のもとで学び働く学生

ブラーフマナやウパニシャッドには、師が自分のもとに一人ないし複数の brahmacārīn をおいていたことを描写する物語がいくつか収録されている⁽³⁵⁾。師の多くはバラモンであるが、王といわれることもある。

次の一節は、ある一人の師（ここでは王）のもとに二人の brahmacārīn がいて、一人は師の牛を守り、もう一人は学習していたと語る：

Jaiminīya-Brāhmana (JB) 2.276 冒頭

datvaś ca ha sautemanaso mitravīc ca daṁṣṭradīyumnas tau ha pratidarśasya
vaibhāvatasya śvāitnasya rājño brahmācārīṇāv āsatuḥ. tayor ha mitravīd
daṁṣṭradīyumna ācāryakarma cakāra. gā ha sma rakṣati. atha hetaro 'dhyāyam eva
cacāra. ...

ダトヴァ・サウテーマナサとミトラヴィッド・ダムシュトラドウムナの二
人は、プラティダルシャ・ヴァイバータ・シュヴァイトナ王の brahmācārīn
たちであった。二人のうち、ミトラヴィッド・ダムシュトラドウムナは師
の用事をした。彼は〔師の〕牛たちを守ったものだった。そしてもう一人
は学習のみを行った。…

「誰々の brahmācārīn」という表現と、仕事の内容からみて、この brahmācārīn
たちは、「師」に属して学習と奉仕をする「ヴェーダ学生」である。

ブラーフmanaとウパニシャッドが語るヴェーダ学生は、師に奉仕し（とくに
牛と祭火の世話）、学習する⁽³⁶⁾。一種の書生といえよう。次の一節も、師が自
分のヴェーダ学生を使役する場面のひとつである：

Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (BĀU) 3.1.2

atha ha yājñavalkyaḥ svam eva brahmācārīṇam uvāca / etāḥ soṃyodaja
sāmaśravā3 iti /

そこで、ヤージュニャヴァルキヤは、他ならぬ自分の brahmācārīn に言っ
た、「君、これら〔の牛〕を連れていけ、サーマシュラヴァスよ！」と。

以上、本章でみてきたとおり、初期・中期ヴェーダ文献における
brahmācārīn という語は、原則として、師の存在を前提とし、師に従属し奉仕
する、「ヴェーダ学生」と解することができる。例外については **2.2**, **2.4** で後

述する。

2 秘義の学習と brahmacārin

2.1 ウパニシャッドの「学者たちの入門」と brahmacarya

ブラーフマナ文献新層、アーラニヤカ文献、およびウパニシャッド文献（以下では便宜上あわせてウパニシャッドと称する⁽³⁷⁾）には、独特な形の入門が語られることがある。すでにヴェーダ祭式に関する学識を有するバラモン学匠が、未曾有の秘義を学ぶために、それを知る人物に「入門」する、という物語がいくつも伝えられているのである。この種の物語では、入門者はすでにヴェーダの知識を有しているから、彼らの「入門」は通常の初心者の入門とは異なることになる。人生最初の入門ではないこと、名高い学匠や神々が入門者となる物語が多いこと、入門を何度も繰り返す場合があること、教える立場にたつのがヴェーダの権威たるバラモンとは限らず王族や牛など非正統的師匠の場合があること、などがこの種の入門の特色である。以下、本稿では、ウパニシャッドに語られるこの種の入門儀礼を、「学者たちの入門」とよぶ⁽³⁸⁾。

この「学者たちの入門」では、上述の AV 最新層からブラーフマナ新層に見られる、GS の入門式の先駆形といえる一連の儀礼行為からなる入門儀礼は言及されない。「学者たちの入門」は基本的に、薪を持参して「私は君に入門しよう」と入門申し込みの口上を述べるというシンプルな形で行われる⁽³⁹⁾。その後、入門者は、教えてくれる人物のもとで一定期間止住する。この止住は brahmacarya とよばれる。

Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad 6.2.4-7; cf. Chāndogya-Upaniṣad 5.3

prehi tu tatra pratītya brahmacaryam vatsyāva iti. ... upaimy aham bhavantam iti.

[学匠アールニは息子シュヴェータケートゥに言った,]「しかし、行け,

そこ（彼が答えられない問い（五火二道説）を問うた王のところ）へ戻って、私たち二人で「王の弟子となって」 brahmācārya を住そう」と。…[アールニは王のもとに赴いて言った,]「私はあなたに入門する」と。

「brahmācārya を住する」という表現は AV からみられる⁽⁴⁰⁾。前述のとおり、brahmācārya は、性的禁欲を含む（あるいは性的禁欲を主とする）生活制限を遵守しつつ務めに励む修行生活を行うことをさす。「学者たちの入門」の場合は、入門者は成人した学匠で、基本的には家長であるから、家長の日常生活から一定期間離れて、修行生活をおくる（vas「住する」）ことになる。

次にあげる物語でも、秘儀を教える前には一年間の止住が必要だとされている。brahmācārya の語は用いられていないが、止住の直前に、初心者でない者（ここではアシュヴィン双神）が秘儀を学ぶ「学者たちの入門」を行っているから、brahmācārya を住することをさしていることがわかる。

ŚB 14.1.1.21-27; ŚBK 16.1.1.12-15

táu hétyocatuh / ūpa tvāyāvēti. kīm anuvakṣyāmāṇāv ity. etām śukrām etām yajñām yāthā-yathaitād yajñāsya śiraḥ pratidhīyāte yāthaiśa kṛtsnō yajñō bhāvatīti. /21/ ... / tán ná sārvasmā ānubrūyāt. / ... /26/ saṃvatsaravāsinē 'nubrūyāt. / eśā vāi saṃvatsarō yā eśā tāpaty. eśā u pravārgyas. tād etām evāitāt prīṇāti. tasmāt saṃvatsaravāsinē 'nubrūyāt. /27/

彼ら（アシュヴィン双神）は出かけて行って言った、「我々は君に入門しよう」と。彼（ダディアンチュ・アータルヴァナ）は言った、「君たちは何を学ぼうというのか」と。「[切断された] 祭式の頭がいかに置き直され、祭式が完全になるか、その例の輝く [知識]、その例の祭式（ブラヴァルギヤ祭）を [学びたい]」と [双神は答えた]。/21/ ... / ... / それ（ブラヴァルギヤ祭）をすべての者には教えてはならない。... /26/ 一年間

[brahmacārya を] 住した者には教えてよい。この熱を発するもの（太陽）は一年なのだ。一方これはブラヴァルギヤである。これをそのときこうして彼は喜ばせることになる。それゆえに、一年間住した者には教えてよい。/27/

ここでいわれる、一年間住した者にのみ秘義を教えてよいという条件は、ウパニシャッドの「学者たちの入門」物語の多くにみられる。これは、後にはGSが規定するヴェーダ学習課程のうち、特定のテキストを学ぶ際には一定期間（多くの場合一年間）の学習誓戒（vedavrata）を行う、という指示に反映されることになる⁽⁴¹⁾。

2.2 秘義を学ぶ資格を有する者としての brahmacārin

上述のとおり、ウパニシャッドの「学者たちの入門」の物語では、学匠や神々が秘義を学ぶ際に「入門」する。つまり彼らは一時的に学生の立場にたち、brahmacārya を住するのだが、こうした秘義学習者が「ヴェーダ学生」（brahmacārin）とよばれる例は、実はほとんどない。次の文章は、brahmacārin の語がそうした秘義学習者をさしている可能性のある、数少ない例のひとつである。

Śāṅkhāyana-Āraṇyaka 8.11; cf. Aitareya-Āraṇyaka 3.2.6; 5.3.3

tā etāḥ saṃhitā nānantevāsine brūyān nāsaṃvatsaravāsine nābrahmacāriṇe nāvedavide nāpavaktra ity ācāryāḥ.

そういうこれらの〔アーラニヤカに語られる〕諸サンヒター（音の結合〔の理論〕）を、近住弟子（antevāsin⁽⁴²⁾）でない者、一年間 [brahmacarya を] 住していない者、brahmacārin でない者、ヴェーダを知らない者、教師でない者に語ってはならない、と師たちはいう。

ここで「サンヒター」とよばれているのは、複数の学派のアーラニヤカないしウパニシャッドで、秘義として語られる主題のひとつである⁽⁴³⁾。この文章の brahmācārin は、明らかに「学習者」ではあるが、秘義を語ってはならない相手が列挙されているという文脈からみて、通常の「ヴェーダ学生」を——少なくとも彼のみを——さしているとは限らない。直後で「ヴェーダを知らない者」に教えるのは不可といわれていることから、「[学者たちの入門を行って一時的に] ヴェーダ学生になっている者」をさしている可能性がある⁽⁴⁴⁾。

2.3 秘義を学ぶ物語に登場する brahmācārin

ウパニシャッドの、「学者たちの入門」を行って秘義を学ぶ物語にも、brahmācārin という語が全く登場しないわけではない。

やや複雑なのは、その種の物語での brahmācārin には、登場のしかたに二つのパターンがあることである。すなわち、(1) 通常のヴェーダ学生であって、物語には脇役として登場する場合⁽⁴⁵⁾と、(2) 物語の冒頭では通常のヴェーダ学生として登場するが、「通常の学習では知ることのできない秘義を、バラモンとは限らない者（ヴェーダ学生が世話をしている牛や祭火など）から教わる」という、秘義を学ぶ物語のヴァリエーションの主人公を務める成り行きになる場合⁽⁴⁶⁾とである。この点に留意してそれぞれの文脈を見極めれば、ウパニシャッドの秘義を学ぶ物語においても、brahmācārin の語は、前節で述べた少数の例を除いて、通常の「ヴェーダ学生」と解して差支えない。

2.4 「ヴェーダ学生」の生活制限を守っている者としての brahmācārin

いっぽう、ブラーフマナ文献以降、必ずしも「[師のもとで師に属する] ヴェーダ学生」であるとは断定しきれない brahmācārin が現れてくる。そのひとつが、ヴェーダ学生と同じ生活制限を課され遵守しているものの、身分としてはヴェーダ学生であるとは限らない人々である。

一部の学派は、ヴェーダの自習 (svādhyāya) を主題とする章を、ブラーフマナ新層ないしアーラニヤカに含んでいる⁽⁴⁷⁾。次に引用するのはその中の一節で、自習中に精液を漏らしてしまった場合について述べたものである。ここに brahmācārīn の語が現れる：

Taittirīya-Āraṇyaka (TĀ) 2.18.2

yó brahmācāry āvakīred amāvāsyāyām rātryām agnīm prāṇīyopasamādhāya dvir
ājyasyopaghātam juhōti kāmāvakīrṇo 'smy ... kāmāya svāhēti.

もし brahmācārīn [である自習者] が [精液を] 漏らしたならば、新月の夜に火を運んできて [薪を] くべ足し、ひと汲みのバターを二回献供する、「カーマよ、私は [精液を] こぼした者 (āvakīrṇin) である。…カーマに、スヴァーハー」と [言って]。

問題は、ここで自習を行っている brahmācārīn が誰かということである。入門して師からヴェーダを学んでいる通常のヴェーダ学生は、授業時間外には当然自習を行うであろう。ではこの文章の brahmācārīn を「ヴェーダ学生」とのみ解釈できるかということ、事情はもう少し複雑である。

自習を行うのは通常のヴェーダ学生だけとは限らない。文脈によって自習を行う主体は異なる⁽⁴⁸⁾。いったんヴェーダ学習を開始したら、学習中も、修了後も、定期的に自習を行って記憶の定着をはかったであろうことと、学習を修了した家長なり祭官なり師なりが、ヴェーダの知識を保ちつづける最も基本的な手段が自習であろうことを考えると、文脈によって主体が異なるのは自然なことである。この点に鑑みると、上掲 TĀ 2.18.2 の brahmācārīn は、「[誰であれその時点で] brahmācārīn である / brahmācārīn の状態である [者]」を意味し、通常のヴェーダ学生を含みつつ、それ以外の、ヴェーダ学生と同じ生活制限に服している者をさすこともあるとみるべきである。

そして、ここに至って、brahmācārīn の語は「性的に禁欲している〔者〕」という意味合いを明確に呈する。上掲の TA 2.18.2 が、brahmācārīn が精液を漏らした際の対処を述べているということは、この文脈での「brahmācārīn の状態である〔者〕」は、精液を漏らしてはならない者だということである。すなわちここでは、brahmācārīn は「〔性的禁欲を含む〕ヴェーダ学生と同じ生活制限を遵守している〔者〕」をさしていることになる。

通常のヴェーダ学生も、修行の一環として性的禁欲を守ることが暗黙の前提であったことは想像に難くない⁽⁴⁹⁾。しかし、ブラーフマナ文献の入門儀礼での師からの訓示に性的禁欲に関する直接的な指示は入っていない（1.4）。逆説的ながら、日常生活では性交を行ってよい人々（家長）が一時的に「学習者」の状態になる場合、すなわち、秘義の学習（2.1）なり自習（本節 2.4）なりを行う場合が問題になって初めて、学習の際の性的禁欲の必要性が前面に押し出されることになる。

3 「ヴェーダ学生」ではない brahmācārīn

前節で論じたとおり、ブラーフマナ文献以降、必ずしも「〔師に属する〕ヴェーダ学生」とは解釈できない brahmācārīn の用例が現れてくる。さらに、後期ヴェーダに属するシュラウタースートラ（共同体祭式綱要書）以降は、明らかに「ヴェーダ学生」ではない例も現れる。本章ではそれらの主な用例を検討する。

3.1 斎戒に服している祭主

ヴェーダの宗教儀礼は、複数の学派の家系が協働して挙行する共同体祭式（シュラウタ祭）と、家庭内で家長が家庭祭官とともにあるいは家長のみで行う家庭儀礼（グリヒヤ祭）との二種に大別されて整備されている。前者はさら

に、2 ヴェーダ (RV, YV) の家系の祭官たちが協働する各種イシュティ祭（穀物を主要な供物とする）と、3 ヴェーダ (RV, YV にサーマヴェーダが加わる）の祭官たちが協働する各種ソーマ祭（ソーマという植物の搾り汁を主要な供物とする）とにわかれる。

シュラウタ祭举行の際には、祭主は斎戒に服する。斎戒には誓戒 (vrata) とよばれるものと潔斎 (dikṣā) とよばれるものがある。具体的な内容は祭式によって異なるが、主に身の清めが要求され、食餌や発話などが制限される。また、祭主を務めるのは既婚の家長であるが（祭式举行には祭主の妻の存在が必要である）、斎戒の間は妻との性的接触も避けて過ごさねばならない。

イシュティ祭の基本形である新満月祭での誓戒において、女性に接さないことについて、ブラーフmana文献は次のようにいう：

Taittirīya-Saṃhitā 2.5.5.6（新満月祭）

tāsyaitād vratām: nāṅtaṃ vaden. ná māmśam aśnīyān. ná striyam ūpeyān. ... etād dhī devāḥ sārvaṃ ná kurvānti. //

彼（新満月祭の祭主）の誓戒は次のとおり。虚偽を話してはならない。肉を食べてはならない。女に近づいてはならない。…というのは、以上すべてのことを神々は行わないから。

このブラーフmana文献の学派に所属するシュラウタースートラは、新満月祭の誓戒に服している祭主が女性に交接した場合の償い（過失の打消し；prāyaścitta）について、次のように述べている。ここに brahmacārin の語が現れる：

Āpastamba-Śrautasūtra 9.15.1 (prāyaścitta) ; cf. BhārSS 9.17; KātyŚS 1.1.13
yo brahmacārī striyam upeyāt sa gardabhaṃ paśum ālabheta.

もし brahmācārīn [の状態である (= 性的禁欲を行っているべき) 祭主] が女に近づいたなら、彼はロバを犠牲獣として [過失の打ち消しの儀礼を] 行うべきである⁽⁵⁰⁾。

この文での brahmācārīn は、前節で述べた「[その時点で（ここでは斎戒に服している時点で）] brahmācārīn である / の状態である [者]、すなわち、[性的禁欲を含む] ヴェーダ学生と同じ生活制限を遵守している [者]」という用法に近い。さらに、この箇所の brahmācārīn は明らかに妻帯者である祭主をさしているから、生活制限の中でもとくに、性的禁欲（誓戒中は妻と交わらないこと）が強く意図されているとみるべきである。従って、ここの brahmācārīn は「性的禁欲を行っている [者]」と解釈すべきである⁽⁵¹⁾。

3.2 結婚式直後の新婚夫婦

結婚は、男女の結びつきを確立して子孫の継続を保つために、個人にとっても社会にとっても重要な行事である。古代インドではすでに RV と AV に「結婚の歌」が収録されている⁽⁵²⁾。後期ヴェーダでは、結婚式は家長（新婦の父と新郎の父）が家庭祭官と共に執り行う家庭儀礼のひとつに分類されて、詳細な儀軌が各学派の GS に規定される。

GS によれば、結婚式の後、初夜を迎える前に、新婚夫婦は三夜のあいだ誓戒に服さねばならない⁽⁵³⁾。その誓戒の規定に brahmācārīn という語が用いられることがある。

Gobhila-Gṛhyasūtra 2.3.15; etc.⁽⁵⁴⁾

tāv ubhau tatprabhṛti trirātram akṣāralavaṇāśīnau brahmācārīṇau bhūmau saha śayīyātām //

彼ら二人（新郎新婦）は、それ（結婚式）以降、三夜のあいだ、刺激物と

塩を食べず, brahmācārin たちとして (= 性的禁欲を行っている者たちとして), 共に地面で寝るべきである。

この文の brahmācārin も、前々節と前節でみた「[誰であれ、その時点で] brahmācārin である / の状態である [者]、すなわち、[性的禁欲を含む] ヴェーダ学生と同じ生活制限を遵守している [者]」という用法の延長線上にある。ここでは、食餌制限や、地面に寝る（寝台を使わない）という制限と並列して述べられており、また新婚夫婦、とくにヴェーダ学習を許されない女性である新婦にヴェーダ学習などの学生生活をこの三夜に義務づけるとは考え得ないから、この文の「brahmācārin たち」は、明らかに「性的禁欲を行っている [者] たち」という意味で用いられている⁽⁵⁵⁾。

この、結婚式から初夜までの新婚夫婦の誓戒の文脈で、学派によっては、brahmācārin の代わりに brahmacarya の語が用いられる：

Śāṅkhāyana-Gṛhyasūtra 1.17.5-6; etc.⁽⁵⁶⁾

trirātram brahmacaryaṃ careyātām /5/ adhaḥ śayīyātām /6/

[結婚式の後] 三夜のあいだ、彼ら二人（新郎新婦）は、brahmacarya を行う (= 性的禁欲を行う) べきである。/5/ 彼ら二人は下で寝るべきである。/6/

先述のとおり、brahmacarya も「[性的禁欲を含む広義の] 修行生活」から狭義の「性的禁欲」まで語義に振幅があるが、ここでは上掲の Gobhila-GS 2.3.15 の brahmācārin と内容的に対応し、狭義の「性的禁欲」を意味している。

3.3 正しくふるまう家長

ヴェーダ文献では、子孫繁栄は重要な話題である。安産祈願は RV からみら

れる⁽⁵⁷⁾。祭式の功德に祭主の子孫繁栄が含まれることはまれではない。家長は、ヴェーダ祭式挙行の際には禁欲するが、日常生活では子孫をつくるために妻と性交を行わねばならない。

中期ヴェーダ後半から、おそらく当時台頭してきた出家苦行主義に対抗して、性交を正当化する、あるいはある程度節制することを奨励する記述が現れる。後期ウパニシャッドには次の文章がみられる：

Praśna-Upaniṣad 1.13

prāṇam vā ete praskandanti ye divā ratyā saṃyujyante / brahmacaryam eva tad yad rātrau ratyā saṃyujyante /

昼間に性の交わりの喜びをもつ者たちは氣息を漏らす。夜に性の交わりの喜びをもつなら、それは brahmacarya に他ならない（性的禁欲⁽⁵⁸⁾を守ることに同じである）。

こうした、「その人の立場において許される状況であれば、性的な交わりをもったとしても性的禁欲を守ったのに等しい」という論理は、ポスト・ヴェーダ文献にも受け継がれる。

『マヌ法典』（Manu-Smṛti；以下 Manu）の「家長の章」は、ひと月のうち家長が妻と交わってもよい日を定める。その文脈で brahmācārin という語が用いられる：

Manu-Smṛti 3.45; 50

ṛtukālābhigāmī syāt svadāranirataḥ sadā /

parvavarjaṃ vrajec cainām tadvrato ratikāmyayā /45/ ...

nindyāsv aṣṭāsu cānyāsu striyo rātriṣu varjayan /

brahmacāry eva bhavati yatra tatrāśrame vasan /50/

「家長は、妊娠に適した」時季に「妻と」交わるべきである、つねに自分の妻に満足して。それを誓戒としていれば、[月の] 節目（新月日・8日目・満月日・14日目）以外は「妊娠適時以外でも」快楽を求めて彼女に近づいてよい。/3.45/...

「妻との交わりを」非難される[6] 夜と、その他の8夜とに、妻たちを避けるならば、どのアーシュラマに住していても、[その家長は] 他ならぬ brahmacārin となる（性的禁欲を守っている者と同じとなる / 学生期のヴェーダ学生と同じとなる）。/3.50/

Manu 3.50 の「～ならば…他ならぬ brahmacārin となる」という文は、禁じられた夜以外であれば家長は妻と交わっても性的禁欲を守ったのに等しいと語っている⁽⁵⁹⁾。さらに、「どのアーシュラマに住していても」という表現は、Manu が説くアーシュラマ論（4.3 で後述）における brahmacārin（いわゆる「学生期」）がここで意識されていることを示す。すなわち、許される時季以外に妻と交わらないならば、家長であっても、学生期にいるヴェーダ学生「と同じく性的に禁欲している者」になる、と述べていることになる。

上掲の Manu と同様の表現は、他の法典⁽⁶⁰⁾、さらには Manu と時代的に近い叙事詩『マハーバーラタ』にもみられる。

Mahābhārata 3.199.12cd; 12.214.10ab

bhāryām gacchan brahmacārī ṭtau bhavati brāhmaṇaḥ /

バラモンは、適時に[のみ] 妻に近づくなら、brahmacārin となる（性的禁欲を守っている者と同じになる）。

4 「ヴェーダ学生」としての brahmācārin : (2) 後期ヴェーダ

4.1 グリヒヤーストラの入門式における brahmācārin

後期ヴェーダに属する GS は、家庭内で家長が執り行う家庭儀礼（グリヒヤ祭）の綱要書で、前述のとおり各学派にそれぞれのものが伝わっている。グリヒヤ祭の中心は人間の生涯の節目節目に行う人生儀礼で、受胎、誕生、子供の成長（命名、お食い初め、初外出、結髪式など）、入門、学習、修了、結婚、そして次世代の受胎・誕生へと、循環構造を描くかたちで規定される⁽⁶¹⁾。

入門式⁽⁶²⁾をはじめとするヴェーダ学習関連の諸儀礼は、GS で、この人生儀礼の一環に組み込まれる。ここで、ヴェーダ文献上初めて、入門式を上位三階級（バラモン、ラージャニヤ/クシャトリヤ、ヴァイシュヤ）すべてが行うべきことが規定される。入門式を行うべき年齢も定められる⁽⁶³⁾。学派によって多少の差異はあるが、主に、バラモン階級の男子の入門は 8 歳、ラージャニヤは 11 歳、ヴァイシュヤは 12 歳とされる⁽⁶⁴⁾。

GS の入門式の章では、規定文の中には brahmācārin の語はほとんど現れない。師は ācārya と明示されることが多いが、入門者は多くの場合、代名詞と彼の行為の動詞だけで示される⁽⁶⁵⁾。brahmācārin の語のほとんどは、師が入門者に対して唱えるマントラの中に含まれている。典型的には、「おまえは brahmācārin である。水 [だけ] を飲め。…」という訓示と、「おまえは私の brahmācārin である」という入門の受け入れ宣言のマントラである⁽⁶⁶⁾。いずれも、AV 最新層とブラーフマナ文献の入門儀礼章からみられるもので、上に論じたとおり、brahmācārin の語は「ヴェーダ学生」をさしている (1.4)。

4.2 各種の儀礼の補助を務める者としての brahmācārin

ーストラ（シュラウターストラおよび GS）には、祭式・儀礼の中で何らか

の補助的役割を担う brahmacārin が言及される場合がある。シュラウタ祭で有名なものとしては、マハーヴラタ祭に brahmacārin と遊女がやりとりをする場面が組み込まれている例がある⁽⁶⁷⁾。

GS では、補助者として、brahmacārin が儀礼の規定文に現れることがある。下記の規定は、結髪式の補助を務める例である：

Hiraṇyakeśi-Gr̥hyasūtra 2.6.1-4 (結髪式)

tr̥ṭiye varṣe cūḍākarma /1/ ... apareṇāgniṃ prāṇmukhaḥ kumāra upaviśati /2/ uttarato mātā brahmacārī vānaḍuham śakṛtpiṇḍam dhārayati /3/ tenāsya keśān pratigṛhṇāti /4/

三歳のときに、結髪式 [が行われるべきである]。/1/ ... 祭火の西側に、東を向いて、[結髪式をしてもらう] 子供が座る。/2/ [祭火の] 北側で、[子供の] 母親、あるいは brahmacārin が、牡牛の糞の団子を持つ。/3/ それによって彼 (子供) の [切られた] 髪を受ける。/4/

このような、その儀礼の主体ではなく補助者として働く brahmacārin は、これといった説明なく規定文の中に登場する⁽⁶⁸⁾。おそらく家長が抱えている書生のような立場の「ヴェーダ学生」であろう。AV 最新層にみられる、家長の財産としてのヴェーダ学生 (1.3) や、ブラーフマナからウパニシャッドにみられる、師のために働くヴェーダ学生 (1.6; 2.3) の、延長線上にあるものといえる。

4.3 アーシュラマ論における「学生期」と brahmacārin

ダルマスートラ (Dharmasūtra, 以下 DhS) 以降、人生に四つの生活様式を想定する、いわゆるアーシュラマ (āśrama 「住期; 住处」) 論が現れる。

これまでも指摘されてきたように⁽⁶⁹⁾、四アーシュラマの名称と順序は、ダ

ルマーストラの時点では必ずしも一定していない。各アーシュラマ「を過ごす者」として挙げられるのは、基本的には、(1) brahmācārin「ヴェーダ学生」、(2) gr̥hastha「家長」、(3) 隠棲者 A、(4) 隠棲者 B である。(1) と (2) はどの学派にもほぼ共通するが、(3) と (4) は学派によって異なる⁽⁷⁰⁾。また、これらが選択肢なのか、順に踏むべき段階なのかについても見解が混在している。後に、Manu になると、アーシュラマは brahmācārin「ヴェーダ学生」、gr̥hastha「家長」、vānaprastha など「林住者」、parivrajaka など「遊行者」の、人生の四段階に整理される。

四アーシュラマを人生の選択肢とする場合も段階とする場合も、まず初めに師に入門してヴェーダ学生となりヴェーダ学習を行うべきとされる点は一致している。ダルマーストラ以降、幼年期に入門式を行うことと、それによって師から二度目に誕生した者（再生族 dvija）となることが、バラモン階級を頂点とする社会の構成員になる条件と位置づけられた⁽⁷¹⁾。この、入門式によって開始する学生期「にいる者」が brahmācārin とよばれたのである⁽⁷²⁾。

このようにアーシュラマ論の文脈における brahmācārin は師のもとで学習に携わる「ヴェーダ学生」をさす。幼年期に入門してから修了して結婚するまでの期間にいるヴェーダ学生と、一生をヴェーダ学生として過ごすものがある⁽⁷³⁾。特に前者は、brahmācārin の語の一般的な意味としてその後も用いられ続け、現代ヒンドウイズムに至っている。

brahmācārin のイメージの形成という観点からいえば、古典期インドのヒンドウイズムの理論的枠組みのひとつであるアーシュラマ論において、「学生期」にいる者に brahmācārin の語が充てられた効果は大きかったであろう。brahmācārin はバラモン社会においてバラモンたちの聖典であるヴェーダを学ぶ「ヴェーダ学生」であるということが、ヒンドウイズム内外に明らかに示されることとなったからである。

むすび

本稿で論じてきたとおり、古代インドにおいて、brahmacārīn の語は、「師」の存在を前提とする「学生」を表す語として、初期ヴェーダから用いられる。AVですでにブラフマンの知識と結びつけられていることから、とくに「ヴェーダ聖典の学習者」「ヴェーダ学生」を意味している。この「ヴェーダ学生」という語義は約一千年にわたるヴェーダ文献の中に一貫して確認される。さらには、後期ヴェーダから成立してきたアーシュラマ論で、「学生期」にいる青少年に充てられた brahmacārīn の語は、「ヴェーダ学生」の意で、現代インドのヒンドゥー文化まで連続する。

一方、中期ヴェーダ以降は、brahmacārīn に、「ヴェーダ学生と同じ生活制限を遵守している [者]」、とくに「性的に禁欲している [者]」という語義が確認され、これもポスト・ヴェーダ文献へと継承される。

brahmacārīn と brahmacārya の2語は、「ヴェーダ学生」と「ヴェーダ学生の修行生活」、あるいは「性的に禁欲している [者]」と「性的禁欲」というように、表裏一体で対応している例は少なくない。ただし、brahmacārya のほうは、初期ヴェーダからすでに、ヴェーダ聖典への関与（学習）のみに限定されない、より広義の修行生活をさすことが多いのに対し [梶原 2016a]、brahmacārīn のほうは、本稿で論じたように、「ヴェーダ学生」という語義が初期ヴェーダから後代まで色濃く継続する点に特徴がある。この相違は、これらの語が狭義の「性的禁欲者」および「性的禁欲」という語義をも示すようになってからも、忘れられるべきではない。また、ヴェーダの伝統の外で、あるいは後で成立した文献における brahmacārīn の語義を解釈する際にも、この点には十分な注意を払う必要がある⁽⁷⁴⁾。

*本稿の内容の一部は、第6回国際ヴェーダ学ワークショップ（カリカット，2014年1月9日）および京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム」第2回シンポジウム（京都大学，2017年3月25日）にて口頭で発表した。科学研究費補助金 25284011 および 17H02268 による研究成果の一部。

注

- 1 動詞 car「動き回る」は基本的に自動詞であるが、名詞の対格と共に「～に携わる；～を行じる，行う」という意で用いられることがある。*brāhman-+car という構文は確認されず，brahmācāryaṃ car, brahmācāryaṃ vas などの形をとる。Gotō 1987: 133-135, esp. n. 172. 下記注 5；40 も参照。
- 2 brāhman の語義については Renou 1949; Thieme 1952; Mayrhofer 1992-1996: 236-238 参照。ヴェーダの宗教を「ブラフマニズム」「バラモン教」とよぶのは brāhman の派生語 brāhmaṇā「祭官階級の人：バラモン」に由来する。
- 3 brahmācārīn, brahmācārya, ヴェーダ学習，入門儀礼という一連のテーマについては多くの先行研究がある。主なものに Gonda 1965; 1979; Kane 1974; 渡瀬 1993; Scharfe 2002; Kajihara 1995; 2002; 2003; 2016a; 2016b; etc.
- 4 AV の Śaunaka, Paippalāda の 2 伝本については次節および注 7 参照。
- 5 梶原 2016a: 79, n. 17 参照。動詞 car は「動き回る」という動作を示すほか，他の動詞の現在分詞と共に用いて「～しつづける」と動作の継続を示すことができる（ここでは「奉仕し続けつつ」）[Delbrück 1888: 390; Jamison and Brereton 2014: vol. 3, 1575]。ここに引用した詩節では，主語 brahmācārīn に car が含まれていることを意識して，brahmācārī carati という表現に本来の「動き回る」という意味をも保持させている可能性がある。Cf. AVŚ 11.5.1/AVP 16.153.1（「ブラフマチャーリン讃歌」，後述）brahmācārīṣṇāṃs carati rōdasī ubhé「brahmācārīn は天地両者を駆り立て続けつつ動き回る」。
- 6 先行研究（この箇所の翻訳ないしそれに対する訳注）でも，この箇所のこの語の解釈は確定していない。これまでのこの箇所の訳については，梶原 2016a: 79, n. 17 参照。主に，AV 以降に明確になってくる意味をあてはめて「ヴェーダ学生」ないし「禁欲している [者]」とする訳（“Brahmanschüler” … “d.h. keusch” [Geldner 1951: 331]）と，ブラフマンに携わる（*brāhman-+car）ことをそのまま読み込む訳（「祈禱を事とし」[辻 1970: 340]）との二方向で解釈されてきた。
- 7 讃歌および詩節の数や配列は AVŚ, AVP の 2 学派間でかなり異なるが，両方の学派に伝わっている讃歌の場合には，その内容はおおむね対応している。本稿では，AVŚ には Whitney and Roth 1966 を，AVP には Bhattacharya による校訂本を用いる。

(Bhattacharya 校訂本は Durgamohan Bhattacharya と Dipak Bhattacharya の父子二代により複数巻にわたって出版された。書誌情報は Kajihara 2009/2010 を参照。本稿ではその後出版された Bhattacharya 2011; 2016 のみ文献表に挙げている)。

AVP にはカシミールとオリッサの2系統の伝承が現存する。前者はカシミール出土の Śārada 文字樺皮写本1本 [Bloomfield and Garbe 1901], 後者はオリッサに伝わる複数の Oriya 文字貝葉写本と紙写本が知られている [Griffiths 2003; etc.]. AVP 研究はまずカシミール写本に拠って始まり, Barret (一部 Edgerton; 書誌情報は Kajihara 2009/2010 参照) による翻刻とテキスト復元が行われた。20世紀後半にオリッサ写本の存在が知られてからは, 両者を用いた校訂が進められ, 21世紀初頭に上述の Bhattacharya 校訂本が完成した。ただし Bhattacharya 校訂本にはテキスト決定の根拠がしばしば曖昧であるなどの批判があり, いくつかの巻は複数の研究者が別個に校訂本を出版している。

- 8 一般に古層とされるのは, 呪術讃歌の巻 (AVŚ 1-5; AVP 1-15), 哲学的讃歌の巻 (AVŚ 8-11; AVP 16-17), 特定の主題の巻 (AVŚ 12-18; AVP 18)。中層とされるのは, 古層の補遺巻 (AVŚ 6-7; AVP 19-20)。新層とされるのは終盤の巻 (AVŚ 19; AVP 19)。最新層は両派の最終巻 (AVŚ 20; AVP 20 の一部)。AVŚ と AVP で讃歌の収録位置が異なる場合が少なくないため, これらは一応の目安である。Whitney and Lanman 1905: 1013ff.; Witzel 1997: 275-283 参照。AVP 20 の位置づけについては Kajihara 2009/2010 参照。
- 9 同讃歌は RV のものとパラレルであるが, AV では両伝承とも RV 版の讃歌の詩節をすべて含み, かつ RV より詩節数が多い。
- 10 Bloomfield 1897: 626; Kajihara 1995. 「ブラフマチャーリン讃歌」では, brahmācārīn が大地と交わって地表に精液を注ぎ, それによって生命が生きる, という表現で, 太陽の降雨および生命生産活動が語られる (AVŚ 11.5.12 / AVP 16.154.2)。禁欲的修行をしているはずのヴェーダ学生が射精する (ibid. c 句: brahmācārī siñcati śānau rétaḥ prthivyaṁ 「brahmācārīn は地表に精液を注ぐ」) というのは一見奇妙であるが, 実際には太陽による降雨が謳われている [Kajihara 1995]。
- 11 動詞 ūpa-nī 「近くに導く」は, 師弟関係の文脈では, 反射態で「[自らに, あるいは自らの弟子として] 入門させる」, 能動態で「[ブラフマチャリヤ (学生としての修行生活) に] 入門させる」を意味する。「[師に] 入門する」ことは ūpa-i 「近くに行く」という動詞で表現される。ūpa-nī の名詞形 Upanayana はグリヒヤーストラ以降に現れて「入門式」を意味する。注 62 も参照。
- 12 梶原 2003: 4-5; 14-15, nn. 10-12; 2013: 58f.; Lubin 2018. 下記 4.3 も参照。
- 13 以下に述べるとおり, tāpas- 「熱」は「苦行」を意味することも多いが (苦行に

よって熱のようなエネルギーを蓄積する)、この詩節の直後で天と地の2つの火 (agnī-) が言及されるので (AVŚ 11.5.11 / AVP 16.154.1)、ここでは「熱」と訳す。太陽と brahmācārīn が重ねられている。

- 14 AVŚ 11.5.26ab / AVP 16.155.6ab tāni kālpan brahmācārī salilāsya prṣṭhē tāpo 'tiṣṭhat tapyāmānaḥ samudré / 「それら (brahmācārīn が生み出した生体諸機能と感官) を整えつつ、brahmācārīn はサリラ (創造讃歌に言及される原初の水) の表面で、苦行を行いつつ (= [太陽として] 熱を発しつつ) 海の上に立った」 (kālpan については Gotō 1987: 113, n. 97 参照)。注 13 も参照。

- 15 たとえば、彼の乞食は次のように謳われる: AVŚ 11.5.9 / AVP 16.153.8 imām bhūmim prthivīm brahmācārī / bhikṣām ā jabhāra prathamó divam ca / té kṛtvā samidhāv ūpāste tāyor ārpitā bhūvanāni viśvā // 「この広大な地を brahmācārīn は最初に乞食物として運んできた、そして天をも。その二つ (天地) を二つの薪となして、彼は崇拜する。それら二つの上に一切の生類は留められている」。

- 16 この讃歌では AVP 11.5.4 / AVP 16.153.4 が帯に言及する。後述の「帯の歌」も参照。帯をさすサンスクリット語はいくつかあるが、ヴェーダ文献においてメーカーという名の帯を締めるのは、ヴェーダ学生と、シュラウタ祭のうち各種ソーマ祭の潔斎者 (dikṣitā) のみである。両者は入門ないし潔斎の際に「胎児になる」とされる点が共通する。Cf. Gonda 1965; 大島 2008; 梶原 2013. この讃歌で brahmācārīn の鬚に言及するのは AVP 11.5.6 / AVP 16.153.6. 同詩節では彼は dikṣitā 「潔斎している」ともいわれる。潔斎をはじめとする各種の斎戒の際の髪と鬚の扱いとその意味については阪本 (後藤) 1994; 2014 参照。鬚を有し、射精能力をもつ [と喩えられる] こと (注 10 参照) は、AV の brahmācārīn が若い少年ではなく第二次性徴期に達した男子であることを示唆している。

- 17 Kajihara 1995; 2002.

- 18 AVP 7.14 (brahman & brahmācārīn). Cf. Taittirīya-Saṃhitā 2.3.10 (brāhman & brāhmaṇā); Kāṭhaka-Saṃhitā 11.7 (do.); Maitrāyaṇī Saṃhitā 2.3.4 (do.). Kajihara 2002: 52–62.

- 19 adhipati になることを祈るマントラ (「支配者の祈禱」) は、AV 古層 (AVŚ 5.24.1 / AVP 15.7.1) およびヤジュルヴェーダ (YV) の散文マントラ (Maitrāyaṇī Saṃhitā 2.7.16; 2.8.14; Taittirīya-Saṃhitā 3.4.5; 7.4.16; Taittirīya-Brahmaṇa 3.7.9; etc.) にも類似句がみられる。brahmācārīn に言及するのはここに引用したもののみである。

- 20 師が既婚の家長であるべきことを直接規定する文献はないが、ブラーフマナ文献以降、師の妻と学生の密通 (の禁止) が言及される。Maitrāyaṇī Saṃhitā 1.6.12 (cf. 後藤 1994b); Chāndogya-Upaniṣad 5.10.9. 注 49 も参照。

- 21 Cf. Kajihara 2002.
- 22 Kajihara 2009/2010 参照。当該部分は AVŚ には対応がない。
- 23 TU 1 と KathŚU の関係、および後者の Katha 派における位置づけについては、Witzel 1980 参照。
- 24 AVP 20 と TU 1, KathŚU の対応については Kajihara 2009/2010: 47-49 参照。AVP 20.46.1; TU 1.4.E については Witzel 1980: 39ff.; Olivelle 1998: 572f. 参照。
- 25 Kauśika-Sūtra (AVŚ 所属) 56.17 はこのマントラを入門式で師が薪をくべるときに唱えると規定。Baudhāyana-GS (Taittirīya 派所属) 2.6 はこれを含め TU 1 から複数のマントラを引用している (Baudhāyana-GS 2.6 が規定する儀礼については Kajihara 2009/2010: 49-51 参照)。このマントラは他に Sāma-Mantra-Brāhmaṇa 2.6.4 (Gobhila-GS 4.8.2; Khādira-GS 3.2.8 (豊穡の儀礼)) にもみられる。
- 26 Cf. Hiranyakeśi-GS 1.5.13 (師が入門式で唱える) suprajāḥ prajāyā bhūyāsam ... subrahmā brahmacāribhiḥ 「子孫によって良き子孫をもつ者に私はなりたい ... brahmacārin たちによって良きブラフマンをもつ者に」; Āpastamba-Mantrapāṭha 2.6.1 (Āpastamba-GS 4.11.22); cf. Taittirīya-Saṃhitā 3.2.3.2. 前注も参照。
- 27 asau 「何某」の部分に入門者の名前を代入して唱える。
- 28 KathB は完全な形では現存せず、断片のみ出版されている: Schroeder 1898; Caland 1920; Sūryakānta 1943; Rosenfield 2004. その中に、upanayana-brāhmaṇa と題された入門儀礼についての断章が含まれている (以下 KathB (u) と略)。その内容は後掲の ŚB 11.5.4 とある程度パラレルである [cf. Kajihara 2009/2010: 45f.]. 本稿で KathB (u) に言及する際は Sūryakānta 刊本のページと行で箇所を示す。
- 29 この 2 派の入門儀礼章の内容はある程度パラレルであるが、アクセント表記に乱れのある写本断片のみが現存する KathB (u) より ŚB のほうがテキストが整っているため、以下では ŚB のテキストを挙げる。
- 30 師の訓示の文中で「…」として省いている部分は、それぞれの訓示に関する解説文である (「おまえは brahmacārin である」と言うことによって、入門者をブラフマンに委ねたことになる; 「水を飲め」と言うことによって、「不死の甘露を飲め」と言ったことになる; 等々)。
- 31 Sāvitrī 「サヴィトリ神に捧げられた [詩節]」。一般には RV 3.62.10 をさす。Sāvitrī とよばれる詩節の同定と思想的展開については Kajihara forthcoming 参照。
- 32 ŚB 11.5.4.6; 12 (ŚBK 13.5.4.6; 12) āthāsmāi sāvitrīm ānvāha. / tām ha smaitām purā samvatsarē 'nvāhuḥ. samvatsarāsaṃmitā vai gārbhāḥ prajāyante. jātā evāsmiṃs tād vācam dadhma iti. /6/ ... / ... / tād āpi ślōkaṃ gāyanti / ācāryō garbhī bhavati hāstam ādhāya dākṣiṇam ṛtīyasyām sá jāyate sāvitrīyā sahā brāhmaṇā iti. /12/ 「次に、その者 (入門者)

- に〔師は〕サーヴィトリを教える。かつて、それ（サーヴィトリ）を人々は一年後に教えたものだった、「胎児たちは一年たってから生まれるのだ。生まれたばかりのこの者（胎児）に言葉を我々は置くことになる」と〔考えて〕。/6/ … /…/ このことについて、また、人々は〔次の〕詩節を歌う：『師は右手を置いて、胎児をもつ者となる。三〔夜〕目に彼（師の胎児）はバラモンとしてサーヴィトリと共に生まれる』と。/12/」；cf. *KāthB* (u) 50.10 *sá vā eṣā brahmācārī sāvitryā sahā prājāyate*. 「そういう彼は brahmācārīn としてサーヴィトリと共に生まれるのだ」。
- 33 以下、本節については梶原 2016a: 43-44 参照。ここに引用した *Taittirīya-Saṃhitā* をはじめ、黒 YV ではサンヒターにブラーフmana部分も含まれる。
- 34 *nidhigopā-*. Cf. *AVŚ* 11.5.10 / *AVP* 16.153.10 (1.2 に引用。brahmācārīn の独占するブラフmanの知識が *nidhī-*, *nihita-* といわれている)；梶原 2016a: 82, n. 46.
- 35 ひとりの師に複数のヴェーダ学生がいたことを示すものに、*sa-brahmācārīn* 「同僚ヴェーダ学生」という語がある。この語はウパニシャッドに一例みられ、GS では用例が増える。*Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* 3.7.1 *sudakṣiṇo ha vai kṣaimiḥ prācīnaśālir jābālau te ha sabrahmācārīṇa āsuh* / 「スダクシナ・クシャイミ、ブラーチーナシャーリ、二人のジャーバーラたち——彼らは同僚ヴェーダ学生たちであった」. Cf. *Jaiminīya-Brāhmaṇa* 1.271 (アールニとアーシャーダが共に *brahmācārya* を行い共に学んだ；梶原 2016a: 82, n. 43 参照)。
- 36 JB 2.276 (ここに引用；師の用事、牛の世話、学習)；*ŚB* 11.3.3.1 (薪をとってく)；*Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad* 3.1.2 (次に引用；牛を追う)；*Chāndogya-Upaniṣad* 4.4 (牛を追う)；4.10.1 (祭火の世話)；cf. 4.3.5 (乞食)。梶原 2016a: 82, n. 43 参照。
- 37 ブラーフmana文献は、広義には、伝統的祭式を扱うブラーフmana部分、秘儀を扱うアーラニヤカ部分、哲学的主題を扱うウパニシャッド部分を包括する。たとえば白 YV では、アーラニヤカ部分（ブラヴァルギヤ祭を扱う箇所）もウパニシャッド（BĀU）もブラーフmanaの一部（*ŚB* 第 14 巻；*ŚBK* 第 16 巻）である。
- 38 この種の入門については、梶原 2003; 2016a; 2016b 参照。
- 39 梶原 2003: 5-9; 2016a: 83, n. 51 に述べたとおり、この入門形式はグリヒヤーストラの入門式の直接の古形を示すものではない。
- 40 *AVŚ* 7.109.7 / *AVP* 4.9.6. *brahmācārya* と共に用いられる動詞については梶原 2016a: 80, n. 25 参照。
- 41 各学派の GS が定める学習誓戒の種類・名称・期間については梶原 2005 参照。学習の前の止住期間と学習誓戒の関係については、梶原 2003; 2005; 2016b: 282-286 参照。本文で引用した *ŚB* 14 のアシュヴィン双神の入門物語で、双神が学ぶのは YV 諸学派の秘儀であるブラヴァルギヤ祭であるが、この祭式の学習規定は GS の

ほかシュラウタースートラにも組み込まれている (avāntaradīkṣā「中間潔斎」)。秘儀部分を学ぶための学習誓戒の詳細については別稿を予定している。

- 42 antevāsin- : 原義は「近くに住む者」。師弟関係の文脈では「住み込みの弟子; 内弟子」をさす。ヴェーダ文献ではほぼヴェーダ学生である。Cf. 梶原 2016a: 92, n. 108.

- 43 Śāṅkhāyana-Āraṇyaka 8.11; Aitareya-Āraṇyaka 3.2.6; 5.3.3; TU 1.3.

- 44 この解釈は、後述する「ヴェーダ学生と同じ生活制限に服している者」という語義に通じる。**2.4** 参照。

- 45 例 : Jaiminīya-Brahmaṇa (JB) 1.22 te hājagmuḥ / te ha brahmacāriṇam ūcuḥ pra ṇo brūhīti / tān ha provāca / 「彼ら (アールニら 5 人のバラモンたち) は [ジャナカ王のところに] 赴いた。彼らは brahmacārin に言った、『我々のことを [王に] 告げよ』と。彼らの [訪問を brahmacārin は王に] 告げた」。これは、アグニホートラ祭について対論するためにバラモン学匠たちが王を訪れ、brahmacārin が王に取り次ぎをする場面である。王族という、バラモン学匠ではない人物のもとにバラモン学匠が赴くという点で、「学者たちの入門」の物語のヴァリエーションのひとつである (この物語には入門申し込みの描写はない)。この物語で brahmacārin が登場するのはこの箇所だけである。これが誰なのかについて先行研究では見解が分かれているが (Bodewitz 1973: 75, n. 3 参照)、王族とはいえ学識の高いことで知られていたジャナカ王が自分のヴェーダ学生を抱えていたか (王が学生を所有する場合があったことについては上掲 JB 2.276 参照)、5 人のバラモン学匠の誰かが自分のヴェーダ学生を同行していたかのどちらかと解するのが妥当であろう。いずれにしても、この場面の brahmacārin は、師の (または師への) 訪問の取り次ぎという仕事を行う、通常のヴェーダ学生である。

- 46 上掲の JB 2.276 に登場するヴェーダ学生は (2) の一例である。二人のヴェーダ学生のうち一人は牛の世話をさせられていたが、学習をしていたほうの学生に知識を共有しようともちかけて断られ、意気消沈していると、彼が世話をしていた牛が、秘義を教えてやると言う : JB 2.276-277 ... tam ha gaur īkṣitvaiva vijajñāv apriyam vā asyeti. /276/ sā hovāca. veda vai yat te 'priyam. mā te 'priyam bhūt. ehy. ahaṃ tubhyam devayānam panthānam vakṣyāmīti. ... /277/ 「… 彼 (牛を守っているほうのミトラヴィッドというヴェーダ学生) を見て、牛は、『彼にはつらいことがあるのだ』とわかった。/276/ 牛は言った、『君につらいことがあると私は知っている。君につらいことがあってはならない。来なさい。私が君に神々に至る道を語ろう』と。… /277/」。プラーフマナ新層からウパニシャッド、さらには初期仏典において、教えを説く際に「来い」(ehi) という呼びかけがしばしばみられることについては、梶

- 原 2016a: 47-48; 58-76 参照。その他、ヴェーダ学生が秘義を学ぶ成り行きになる例としては、Chāndogya-Upaniṣad (ChU) 4.4-4.10 (師に入門して brahmācārya を住し、師の牛を追う生活をしていて Satyakāma Jābāla が、まず牛、火、鶯鳥、マドグ鳥から、その後師から、ブラフマンの秘義を教わる) [cf. 梶原 2003: 15f, n. 13; 梶原 2016a: 94, n. 131]; ChU 4.10 (師の祭火の世話をしていた Upakosala Kāmalāyana という brahmācārīn が、まず祭火から、その後師から、ブラフマンの秘義を教わる)。
- 47 ŚB 11.5.6; 11.5.7; Taittirīya-Āraṇyaka (TĀ) 2. Cf. Malamoud 1977: 83, n. 2; 永ノ尾 1992: 72f.
- 48 GS では、自習の規定の対象は、それに先立つ儀礼の主体にあわせて、ヴェーダ学生、修了者 (snātaka)、家長などのばらつきを示す [永ノ尾 1992: 72-73; cf. Oldenberg 1892: xxviii]. TĀ 2 は章全体が自習を主題とするが、上掲の TĀ 2.8.12 の少し前で、五大供犠 (pañca-mahāyajña) について述べている (TĀ 2.10.1; 6)。五大供犠は、ブラフマンへの供犠 (brahmayajñā), 神々への供犠 (devayajñā), 祖霊たちへの供犠 (pitṛyajñā), 人間たちへの供犠 (manuṣyayajñā), 諸存在への供犠 (bhūtayajñā) からなり、ブラフマンへの供犠は自習による (TĀ 2.10.6 yāt svādhyāyām ādhīyātīkam apy ṛcām yājuḥ sāmā vā tād brahmayajñāḥ sām tiṣṭhate. 「もし自習を行うなら、たとえ一つのリチュだけであっても、あるいはヤジュス、またはサーマン [だけであっても]、それはブラフマンへの供犠となる」 (この文のアクセントの問題については Malamoud 1977: 107 参照。Cf. Gotō 1990: 1005, n. 95)。同様のことは ŚB 11.5.6.1; 3 にも述べられる。TĀ と ŚB は五大供犠を誰が行うかを記さないが、祭式や祖霊祭を執り行うことから、家長とみるのが自然である。後には五大供犠は家長の義務として明記される (Manu-Smṛti 3.67-71; etc.)。
- 49 ウパニシャッド文献以降、師の妻との密通は大罪のひとつとして挙げられる：ChU 5.10.9 steno hiraṇyasya surā pibānś ca guros talpam āvasan brahmahā ca / ete patati catvāra pañcamas cācaraṁś tai[h]. 「金を盗む者、スラーを飲む者、師 (guru) の寢床で過ごす者、バラモンを殺す者、これら四者は落ちる。五番目は彼らと交わる者である」。Cf. 注 20.
- 50 GS の一部とダルマ文献では、ヴェーダ学生や斎戒中の祭主などに限らず、バラモン一般について、[精液を不時に] 漏らした者 (avakīrṇin) の過ちの打消しの儀礼としてロバを犠牲獣とすることが規定される。Pāraskara-GS 3.12.1ff.; Gautama-Dharmasūtra 3.5.17 (23.17); Āpastamba-Dharmasūtra 1.9.26.8f.; etc. Cf. Weber 1868: 102f.; Gampert 1939: 139ff. なお、ヴェーダ学生が義務を怠った際の avakīrṇivrata については、梶原 2003: 19f, n. 40; 2016b: 287, n. 32 参照。
- 51 「性的禁欲を行っている [者]」という形容詞的用法がより明らかになるのは、

- brahmacārin が女性形で用いられる場合である（女性はヴェーダ学習を行わないのでヴェーダ学生にはならない）。例：Bhāradvāja-Śrautasūtra 10.9.9（ソーマ祭 [Jyotiṣṭoma]、潔斎）payovratā patnī brahmacāriṇī bhavati 「ミルク（潔斎時の食物）を食べて、[祭主の] 妻は brahmacāriṇī（性的禁欲を行っている [女]）でいる」。Cf. Hiranyakeśi-GS 1.6.19.2（花嫁の条件のひとつが brahmacāriṇī 「純潔である [女]」）；Āgniveśya-GS 1.6.1: 34.9（同）。
- 52 RV 10.85; AVŚ 14; AVP 18.
- 53 GS の結婚式儀軌については辻 1975-76 参照。新婦が初夜を迎えるまでに三夜を過ごすことについては、RV 10.85.38-41 も参照（新婦はまずソーマ、ガンダルヴァ、アグニの三神に与えられてから、人間の新郎に与えられる）。
- 54 この文脈で brahmacāriṇau (du.) と表現する GS：Āśvalāyana-GS 1.8.10; Khādīra-GS 1.4.9; Gobhila-GS 2.3.15（ここに引用）；Jaiminīya-GS 1.22: 23.4-5; Baudhāyana-GS 1.5.16; Bhāradvāja-GS 1.19: 20.1-2; Hiranyakeśi-GS 1.6.23.10; Vaikhānasa-GS 3.8: 41.17-18; Āgniveśya-GS 1.6.3: 39.8.
- 55 性交（mithunam upa-i）の禁止と明言する GS もある：Kauṣītaka-GS 1.10.18-19 samvatsaram na mithunam upeyātām dvādaśarātram ṣaḍrātram /18/ trirātram antataḥ /19/ 「[結婚式後] 一年間は [新婚夫婦は] 性交を行ってはならない。[あるいは] 12 夜、6 夜。/18/ [あるいは] 少なくとも 3 夜の間。/19/」；Pāraskara-GS 1.8.21.
- 56 この文脈で brahmacaryaṃ car と表現する GS：Śāṅkhāyana-GS 1.17.5（ここに引用）；Kāthaka-GS 30.1-2; Mānava-GS 1.14.14; Vārāha-GS 15.24; cf. Āpastamba-GS 3.8.8.
- 57 RV 10.184; etc. 胎児発生に関する思想の展開については西村 2009 参照。
- 58 brahmacarya が狭義の「性的禁欲」をさす古い例の一つ [梶原 2016a: 45]。
- 59 Manu-Smṛti に対する Medhātithi 注はこの箇所を brahmacaryaphalaṃ prāpnoti 「ブラフマチャリヤの果報を獲得する」と説明する。
- 60 例：Yājñavalkya-Smṛti 1.79cd: brahmacāry eva parvāny ādyās catasras tu varjayet // 「brahmacārin として / の状態で [家長は] 節目の日々と [月経の] 最初の四日間 [妻を] 避けるべきである」。
- 61 学派によっては人生儀礼の他、シュラウタ祭の枠組みに入らなかった種々の儀礼の規定が GS に入る。グリヒヤ祭と GS の構造については Gonda 1980; 永ノ尾 1991 参照。シュラウタ祭とグリヒヤ祭は、形式上は、前者が三祭火、後者が一祭火による点異なるが、規模や文脈によってどちらの形式でも行い得るもの（初穂祭や賓客接待など）もある。
- 62 GS 以降、入門儀礼は「入門式（主にウパナヤナ [Upanayana]、まれにウパーヤナ [Upāyana]）」という名詞でよばれるようになる。梶原 2003: 12, n. 1; 2016a: 77,

- n. 4; 2016b: 271, n.1 参照。上記注 11 も参照。
- 63 GS 以前には、入門年齢に関する記述はほとんどない。数少ない例：ChU 6.1.1 (シュヴェータケートウ・アールネーヤが12年間学習し24歳で家に帰った=12歳で入門); cf. ChU 4.10.1 (ウパコーサラ・カーマラーヤナが12年間師のもとで brahmācārya を住し祭火の世話をした)。
- 64 入門年齢は学派によってある程度ばらつきがあり、願望に応じた選択肢を示す学派もあるが、基本的には8, 11, 12 という数が好まれる [Mookerji 1974: 174f.; Kane 1974: 274–276; 梶原 2003: 14–15, n. 11]。Oldenberg [1886: 59] が指摘したように、中期ヴェーダからみられる、各階級に配される韻律の一脚の音節数が意識されているとみられる (バラモン階級とガーヤत्री韻律 [8 音 3 脚], クシャトリヤ階級とトリシュトブ韻律 [11 音 4 脚], ヴァイシュヤ階級とジャガティー韻律 [12 音 4 脚])。Cf. 梶原 2003: 13, n. 6; 2016b: 277, n. 14。
- 65 まれに kumāra 「少年」と示される場合もある。例：Āpastamba-GS 4.11.1 brahmācāryam āgām iti kumāra āha. 「『brahmācārya に私はやってきた』と少年は言う」。ŚB 11.5.4.1 (1.4 に引用) 参照。
- 66 文章が定型化していること、ブラーフマナ文献が「マントラに対するブラーフマナの説明」の形で師の言葉の一語一語に意義解釈を付しているところから、もとは入門時の師弟のやりとりであったとしても、中期ヴェーダにはすでにマントラとしてある程度固定化されていたものとみられる。
- 67 Aitareya-Āraṇyaka 5.1.5 (Mahāvratā) … brahmācāripuṃścalyoḥ sampravādo 「… brahmācārin と遊女の対話が『行われる』」。Keith 1909: 277, n. 15 参照。
- 68 類例：Āpastamba-GS 4.10.8 (入門式で、入門者の母か brahmācārin が牛糞の団子に大麦を撒いて入門者の〔身支度の際に切る〕髪を受ける); Kāṭhaka-GS 25.29 (結婚式で、花嫁の兄か brahmācārin が献供); Śāṅkhāyana-GS 1.13.8 (結婚式で、言葉を抑制している brahmācārin に水壺を渡す); Kauṣītaka-GS 1.8.19 (同); etc.
- 69 アーシュラマ論については渡瀬 1981; Olivelle 1993; 土田 1993 などを参照。
- 70 Vāsiṣṭha-DhS 7.1–2 catvāra āśramāḥ /1/ brahmācāri-gṛhastha-vānaprastha-pariprājākāḥ /2/ 「アーシュラマは四つある：brahmācārin (ヴェーダ学生), 家長, 林住者, 遊行者, と」; 7.3–10.31; cf. Āpastamba-DhS 2.9.21.1–19; 2.9.22.6–8 (gārhaṣṭhya, ācāryakula, mauna, vānaprastha); Baudhāyana-DhS 2.6.11.12–15 (brahmācārin, gṛhastha, vānaprastha = vaikhāṇasa, samnyāsa); 2.10.17.1–2; Gautama-DhS 1.3.1–35 (brahmācārin, gṛhastha, bhikṣu, vaikhāṇasa). 選択肢としてのアーシュラマと段階としてのそれとについては早くから議論が行われてきた [渡瀬 1981; Olivelle 1993; etc.]。また、アーシュラマ論はダルマ文献が構築した理論であって、叙事詩などに

現れる隠遁者や森林苦行者の生活の描写と必ずしも対応していないことも指摘されている〔土田1993; 藤井2016〕。

- 71 入門の際の師からの誕生については 1.2, 1.4 参照。Cf. 梶原2003: 4-5; 14-15, nn. 10-12; 2013: 58f.; Lubin 2018.
- 72 一学派 (Āpastamba-DhS) のみ学生期を ācāryakula 「師の家に属する〔住期〕」とよぶ。注70参照。Olivelle [1993: 80-81] は、入門式のすぐ後の時期について、選択肢としての学生期 (終生学生でいる生き方) というより、住期を選択するまでの準備教育期間 (“initiatory studentship as preparation for the āśramas” [Olivelle 1993: 80]) である可能性を述べている。
- 73 終生を学生として過ごすことはウパニシャッドから言及がみられる (ChU 2.23.1)。
- 74 本稿では紙幅の都合上、ヴェーダ文献外の用法には立ち入らなかったが、仏教文献では、brahmacarya は広義から狭義までのさまざまな意味を示しつつ頻出する〔梶原2016a〕のに対し、brahmacārin は用例数をはるかに少ないことにも、この観点から注意が払われるべきであろう。この問題については別稿を期す。

略号

AV = Atharvaveda / AVP = Atharvaveda Paippalāda recension / AVŚ = Atharvaveda Śaunaka recension / BĀU = Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad / BhārŚS = Bhāradvāja-Śrautasūtra / ChU = Chāndogya-Upaniṣad / DhS = Dharmasūtra / GS = Gṛhyasūtra / KāṭhB = Kāṭha-Brāhmaṇa / KāṭhB (u) = KāṭhB 中の upanayana-brāhmaṇa 断章 / KāṭhŚU = Kāṭha-Śikṣā-Upaniṣad / KātyŚS = Kātyāyana-Śrautasūtra / JB = Jaiminīya-Brāhmaṇa / Manu = Manu-Smṛti / PB = Pāṇcaviṃśa-Brāhmaṇa / ṚV = Ṛgveda / ŚB = Śatapatha-Brāhmaṇa (特に注記がなければ Mādhyandina recension) / ŚBK = ŚB Kāṇva recension / TĀ = Taittirīya-Āraṇyaka / TS = Taittirīya-Saṃhitā / TU = Taittirīya-Upaniṣad / YV = Yajurveda

参考文献

- Bhattacharya, Dipak 2011. *The Paippalāda-Saṃhitā of the Atharvaveda. Volume three, consisting of the seventeenth and eighteenth kāṇḍas*. Kolkata.
- 2016. *The Paippalāda-Saṃhitā of the Atharvaveda. Volume four, consisting of the nineteenth and twentieth kāṇḍas*. Kolkata.
- Bloomfield, Maurice 1897. *Hymns of the Atharva-Veda together with Extracts from the Ritual*

- Books and the Commentaries*. Sacred Books of the East 42. Oxford.
- Bloomfield, M. and R. Garbe 1901. *The Kashmirian Atharva-Veda (School of the Paippalādas)*. Baltimore.
- Bodewitz, H. 1973. *Jaiminīya Brāhmaṇa I, 1–65. Translation and Commentary. With a Study Agnihotra and Prāṇāgnihotra*. Leiden.
- Caland, W. 1920. Brāhmaṇa- en Sūtra-aanwinsten. *Verslagen en mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen* IV: 461–498. Amsterdam.
- Delbrück, B. 1888. *Altindische Syntax*. Halle.
- 永ノ尾信悟 1992. 「グリフヤーストラ文献にみられる儀礼変容」『東洋文化研究所紀要』118: 43–86.
- 藤井正人 2016. 「社会に取り込まれた苦行——ヴァーナブラスタ（林住者）と山林苦行者——」シンポジウム「古代インドにおけるアセティシズムの諸相——禁欲・苦行・出家——」口頭報告，京都大学，2016年3月25日．
- Gampert, Wilhelm 1939. *Die Sühnezeremonien in der altindischen Rechtsliteratur*. Prag.
- Gonda, J. 1965. *Change and Continuity in Indian Religion*. Berlin.
- 1979. Upanayana. *Indologica Taurinensia* 7: 253–259.
- 1980. *Vedic Ritual: the Non-Solemn Rites*. Leiden.
- Gotō, Toshifumi (後藤 敏文) 1987. *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien.
- 1990. Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1. *amⁱ*, 2. *ay/i*, 3. *as/s*. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 15.4: 987–1012.
- 1994a. 「Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1,2,3」『印度学仏教学研究』43.1: 39–44.
- 1994b. 「アグニの密通」『インドの夢 インドの愛』（上村勝彦・宮本啓一編）48–49. 春秋社．
- Griffiths, Arlo 2003. The Orissa Manuscripts of the Paippalāda Saṃhitā. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 153.2: 333–370.
- Jamison, Stephanie W. and Joel P. Brereton 2014. *The Rigveda: the Earliest Religious Poetry of India*. 3 vols. Oxford University Press, New York.
- 梶原三恵子 (Kajihara, Mieko) 1995. The brahmācārīn in the Atharvaveda. 『印度学仏教学研究』43.2: 1–6.
- 2002. *The brahmācārīn in the Veda*. Ph.D. thesis, Harvard University.
- 2003. 「ヴェーダ入門儀礼の二つの相——通過儀礼と学習儀礼——」『佛教学セミナー』78: 1–20.

- 2005. 「ヴェーダ学習と誓戒」『佛教の思想と文化の諸相』161-175. 禅学研究会.
- 2009/2010. The “*gṛhya*” Formulas in Paippalāda-Saṃhitā 20. *Zinbun. Annals of the Institute for Research in Humanities* 42: 39-62.
- 2013. 「聖なる〈ことば〉の伝承——古代インドのヴェーダ学生をめぐって」『文化交流研究』26: 47-61.
- 2016a. 「ウパニシャッドと初期仏典の一接点：入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ」『人文学報』109: 33-102.
- 2016b. The Upanayana and the ‘Repeated Upanayana (s)’ . In: *Vedic Investigations* (ed. A. Parpola and P. Koskikallio): 271-296. Delhi.
- 2018. 「インドにおけるヴェーダの伝承について」『国際哲学研究』7: 51-55.
- forthcoming. The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond. *Journal of Indian Studies*.
- Kane, Pandurang Vaman 1974. *History of Dharmaśāstra. Ancient and mediaeval Religions and Civil Law*, II.1. 2nd edition. Poona.
- Keith, Arthur Berriedale 1909. *The Aitareya Āraṇyaka*. Oxford.
- Lubin, Timothy 2018. The Vedic Student: *Brahmacārin*. In: *Hindu Law: A New History of Dharma* (ed. Patrick Olivelle and Donald R. Davis, Jr.) 98-112. Oxford University Press, Oxford.
- Malamoud, Charles 1977. *Le Svādhyāya: récitation personnelle du Veda: Taittirīya-Āraṇyaka Livre II: texte traduit et commenté*. Paris.
- Mayrhofer, Manfred 1992-96. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, II. Bd. Heidelberg.
- Mookerji, Radha Kumud 1947. *Ancient Indian Education: Brahmanical and Buddhist*. London.
- 西村直子 2009. 「ヴェーダ文献における胎児の発生と輪廻説」印度学宗教学会『論集』36: 69-93.
- Oldenberg, Hermann 1886. *The Grihya-Sūtras. Rules of Vedic Domestic Ceremonies*, I. The Sacred Books of the East 29. Oxford.
- 1892. *The Grihya-Sūtras. Rules of Vedic Domestic Ceremonies*, II. The Sacred Books of the East 30. Oxford.
- Olivelle, Patrick 1993. *The Āśrama System. The History and Hermeneutics of a Religious Institution*. Oxford University Press, New York.
- 1998. *The Early Upaniṣads. Annotated Text and Translation*. Oxford University Press.
- 大島 智靖 2008. 『ヴェーダ祭式におけるアグニシュトーマ祭の潔斎思想：ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナを中心に』大阪大学博士論文.

- Renou, Louis 1949. Sur la notion de *brāhman*. *Journal Asiatique* 237: 7–46.
- Rosenfield, Susan 2004. *Kaṭha Brāhmaṇa Fragments: A Critical Edition, Translation, and Study*. Ph.D. Dissertation, Harvard University.
- 阪本（後藤）純子 1994. 「髪と鬚」『日本仏教学会年報』 59: 77–90.
- 2014. 「出家と髪・鬚の除去——ジャイナ教と仏教との対比——」『奥田聖應先生 頌寿記念インド学仏教学論集』 334–349. 佼成出版社.
- Scharfe, Harmut 2002. *Education in Ancient India*. Leiden.
- Schroeder, Leopold von 1898. Die Tübinger Kaṭha-Handschriften und ihre Beziehung zum Taittirīya-Āraṇyaka. *Sitzungsberichte der Wiener Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse* 137.4.
- Sūryakānta 1943. *Kāṭhaka-Saṃkalana. Extracts from the lost Kāṭhaka-Brāhmaṇa, Kāṭhaka-Śrautasūtra & Kāṭhaka-Gṛhyasūtras*. Lahore.
- Thieme, Paul 1952. *Brāhman*. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 102: 91–129 (= *Kleine Schriften* I 100–138).
- 辻直四郎 1970. 『リグ・ヴェーダ讃歌』 岩波文庫.
- 1975–76. 「古代インドの婚姻儀式」『鈴木学術年報』 12–13 (辻直四郎『ヴェーダ学論集』 岩波書店 1977: 282–329 に再録).
- 土田龍太郎 1993. 「隠棲の問題」『東洋文化』 41–86.
- 渡瀬信之 1981. 「Dharmasūtra において見出される Āśrama 観」『東海大学紀要 文学部』 36: 1–18.
- 1993. 「Brahmacārin 前史」『東洋文化』 73: 67–96.
- Weber, Albrecht 1868. Collectanea über die Kastenverhältnisse in den Brāhmaṇa und Sūtra. In: *Indische Studien* 10: 1–160. Leipzig.
- Whitney, W. D. and Ch. R. Lanman 1905. *Atharva-Veda-Saṃhitā*. Harvard Oriental Series 7–8. Cambridge, Massachusetts.
- Whitney, William Dwight and R. Roth 1966. *Atharva Veda Sanhita. Dritte unveränderte Auflage nach der von Max Lindenau besorgten zweiten Auflage*. Bonn (2nd. ed. Berlin 1924).
- Witzel, Michael 1997. The Development of the Vedic Canon and its Schools: The Social and Political Milieu. In: *Inside the Texts, Beyond the Texts* (ed. M. Witzel): 257–345. Cambridge, Massachusetts.
- 1980. Die Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad und ihr verhältnis zur Śikṣāvallī der Taittirīya-Upaniṣad [2.1–7.6]. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 24: 21–82.

The Meanings of the Term *brahmacārín*- in the Veda

by Mieko KAJIHARA

The Sanskrit term *brahmacārín*-, literally “one who is working on the *bráhman*,” is attested since the early stage of the Vedic literature in ancient India. Since it includes the word *bráhman*, one of the most important ideas in the Vedic religion, it must have represented a figure important to the Vedic culture.

Generally, the term *brahmacārín* means “the Vedic student,” who learns the Vedic canon from his teacher. This meaning is attested since the early stage of the Veda. In addition, especially since the middle stage of the Veda, this term sometimes means “one who is keeping chastity; be chaste.” The problem is that the latter meaning can be applied to those who are not the Vedic students, or even to the people who have nothing to do with the Veda-learning.

This paper examines comprehensively the usages of the term *brahmacārín* in the Vedic literature in order to clarify how the above two meanings have developed. The key is that the Vedic student is required to lead an ascetic life. And, one whoever is going to learn something cryptic, or is going to be pure, is required to behave like the Vedic student temporarily, even if he is not a Vedic student proper.